

(西暦) 2017年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

精神科デイケア利用者に対する「こころの天気」描画法活用作業療法集団プログラムの検討

学位の種類：修士（作業療法学）

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号：15896605

氏名：古御門 幸奈

(指導教員名：谷村 厚子 准教授)

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

【はじめに】精神障害者が自分らしくよりよい生活を営むためには、自分の価値ある作業についての理解を深め、生活の中でよくしたいことを明らかにする必要がある。しかし、このような目的を持つ精神科デイケアプログラムに関する研究は少ない。そこで本研究では「こころの天気」描画法を活用して自身の内面と生活を振り返り、価値ある作業について小集団で話し合うプログラム（以下、本プログラム）を、週 1 回 90 分 3 ヶ月間実施した。

【目的】本研究の目的は、精神科デイケアを利用し、本プログラムに参加した群（以下、実施群）と通常精神科デイケアプログラムのみに参加した群（以下、対照群）の、プログラム開始時と終了時の「生活の中でよくしたいこと」に関する記述文節数と事項数、作業に関する自己評価改訂第 2 版（以下、OSA II）の作業有能性、環境の影響、作業同一性（価値）、WHO Quality of Life 26（以下、QOL26）の QOL、精神障害者社会生活評価尺度（以下、LASMI）の社会生活能力の変化を比較検討し、本プログラムの影響を明らかにすることである。

【方法】研究デザインは、本人の希望により振り分けた実施群と対照群を比較した、非ランダム化比較試験とした。研究対象者は、A 病院精神科デイケア利用者、実施群 22 名、対照群 23 名とした。実施期間は、①2016 年 10 月～12 月（2 小集団）、②2017 年 2 月～4 月（2 小集団）、③2017 年 6 月～8 月（1 小集団）で、実施群は全部で 5 つの小集団であった。評価は、プログラム開始時と終了時に、対象者の自己記入による「生活の中でよくしたいこと」質問用紙、OSA II、QOL26 と、A 病院精神科デイケアスタッフの記入による LASMI を行った。統計解析には R2.8.1 を使用し、Mann-Whitney の U 検定と Wilcoxon の符号付順位和検定を用いて比較検討した。危険率 5%未満を有意差があるとし、効果量 0.3 以上を変化があるとした。

【結果】プログラム終了時、実施群の「よくしたいこと」の全記述事項数が対象群および開始時に比べて有意に増加し、習慣化領域の記述事項数が開始時に比べて有意に向上した。加えて LASMI の自己認識能力が開始時に比べて向上した。一方、OSA II の作業有能性の習慣化領域と全項目合計が対照群に比べて有意に低下し、意志領域が開始時に比べて低下した。同様に QOL26 の社会的関係領域と全体が開始時に比べて低下した。

【考察】「こころの天気」描画法を用いることで、参加者の価値ある作業について話し合うことが容易になった。プログラム終了時、参加者が認識する「生活の中でよくしたいこと」が増加し、特に習慣化領域に関する「よくしたいこと」が増加した。加えて他者評価である LASMI の自己認識領域が向上した。一方、自己評価である作業有能性と QOL の一部は低下した。以上より、本プログラムにより、特に習慣と役割および環境に関わる「生活をよくしたい」というニーズが高まる可能性が示唆された。